のお華束があり、

第1号

弥陀の名号となへつつ

昨

ておられるようでした。

信心まことにうるひとは 憶念の心つねにして

も要らずゆっくりと参拝できました。

暖かく風もない絶好の日和で、コー

佛恩報ずるおもひあり

親鸞聖人の和讃

皆様はしずかに参拝されていました。

お内陣のお飾りは、

紙面内容 東本願寺報恩講に 3面 2面 面 実 安 仏 六年ぶりのご影堂に感激 楽 父 教 を 寺 豆 追 年 知 憶 間 識 行 す 第 事 回

御堂衆の響き渡るお勤めに、ご門徒の 前に座り、お勤めに耳を澄ませました。 修復されたご影堂に参拝し親鸞聖人の 拝致しました。当日は十一月としては わすように素晴らしい佛花・いくつも ご影堂の前で写真撮影をした後、ご ご門徒の皆様三十人とご一緒に参 年十一月二十六日東本願寺報恩講 私たちに教えを伝え 聖人のお徳を顕

本山御影堂前白洲にて

る 電話 編集発行

名古屋市瑞穂区井戸田町一の八〇 〇五二 (八四一) 二六〇六 安楽寺住職 吉田和良

自分の身におきる事に戸惑う。体の変調は 驚き、熱で起きれなくて先が不安になる等、

の事実に頷く。細かい字が見づらいことに

ように思う。

人として生まれたことに感謝すると同時

ります。

管理の補助金としても使用させて頂いてお 成十年に設立しました安楽寺会館の維持 平成七年より再発足致しました。また、平 寺の什器・備品の充実の資金を供するため、

受け付けておりますので、ご入会頂きます

ご協力を頂けるようでしたら、引き続き

よう宜しくお願い申し上げます。

責任役員・総代・世話方一同

老病死は誰も避けることが出来ない身

お気持ちを心から受け止めることが出来た るとともに、葬儀を勤めたご門徒の皆様の き添った。別れとは悲しいものだと実感す 九年間見守ってくれた父に感謝の思いで付

ベッドに横たわる父を見舞いながら、

亡くなる前日に、病室で一日過ごした。

行に熱を出して行けなかったのを気遣って、

と、生前言っていた父の想いを深く心に刻

「ご聖人のご遠忌までは生きていたい」

うご門徒の皆様と真剣に向き合う時が来て ことはない。お念仏の教えや、その場に集 問い返す。自己の生き方を見直すのに遅い

安楽寺佛佳会ご入会の

け止めて「私がすべき事は何か」と、自分に

自分の思いを超えてある日突然やってくる。 残された時間は限りある」としつかり受

いると思う毎日である。

宗祖親鸞聖人七五〇回御遠忌をお迎えした

んで、まず今年一年、日々研鑚して来年の

いと決意を新たにする年の始めである。

きまして厚くお礼申し上げます。

佛佳会は、安楽寺の建物の修理・保全や

法要の折に佛佳会ご入会のお申し込みを頂

昨年十一月、ご門徒の皆様には、報恩講

目にしみたことを思い出す。高校の修学旅 で信州へ行く途中、トンネルに入ると煙が 時々家族で旅行に出かけた。中央線のSL く中日球場へ連れて行ってくれた。また 寺の住職であったからである。

昨年四月三日実家の父が亡くなった。満

私が安楽寺に縁があったのも父が

実父を追憶する

父はドラゴンズファンで、小学生の頃よ

後日連れて行ってくれた事もあった。

(2)

平成22年1月1 (3) 九月十三日 八月八日 五月十三日 いわれを聞きひらくことが願われます。 釈尊のお弟子目連の故事に基づいて勤める法要です。 亡きご先祖を偲び、ご先祖が喜んでおられたお念仏の 月十三日 月一日 勤められる法要です。 亡き人を偲び、仏法の縁を頂いたことを喜ぶと共に、 どを焼却します。お斎のお接待致します。 寺の入口にある祠にお祭りしてある為麿塚でお勤 報謝の思いをもって新しい年に望む仏事です。おぜ 聴聞の大切さが子孫へ伝えられていく事を願って めします。大切にしてきた仏事・神事に関わる物な んざいの接待あります。 年の初めに、荘厳を整え身も心も引き締め、 午前·午後 午前十時 午前十時 午前·午後 午前・午後 為麿塚法要 盂蘭盆会法要 秋季永代経 春季永代経 修正会 初盆は八月七日 仏恩



十一月十三日

午前·午後

親鸞聖人のご命日(十一月二十八

日)に聖人の遺徳を偲びお念仏のみ

教えを私たちに伝えてくださった

十一月十二日

午後

報恩講

平成22年度 (2010年)

分の生活を振り返る大切なひとときです。

各月十三日、お招きした先生にご法話して

十月十三日(女性法話)午前のみ

六月十三日、

七月十三日

十二月十三日

いただきます。仏法を聴聞して、日頃の自





定例法話

午前・午後

二月十三日、

三月十三日、

四月十三日(花まつり)甘茶接待

仏教豆知識

より創刊号

出来ないことばかりです。

も私たちの人生において避けて通ることが 悩を指します。これらは、どれ一つ取って と・病むこと・そして死ぬことの四つの苦

病・死』を他人事として考え、自分の問題

の学びを始めることが願われてい

の人生の歩みの中で、聖人のみ教え

の歩みが始まっています。一人一人

私たちは、逃れられない身の事実、『老

とは受け止めることが中々出来ません。

本当にそんな意味の言葉でしょうか?

四苦」とは、生まれること・老いるこ

だけで恐れて震え上がります。

ても、

「もう四苦八苦だ」と、よく口にしますが

私たちは、物事の事態が行き詰まった時

『四苦』

と聞かされると動揺し、病と戦う前に「気」

に気づき、それが手に負えない重大なこと ません。「病」はある日、自分の体調の変化

が衰え、諦めと苦悩が増していきます。

けて真宗大谷派宗門、

寺院、ご門徒

親鸞聖人の七百五十回御遠忌に向

来年平成二十三年にお迎えする

死」は誰もがいずれ訪れると分かってい

それを真剣に考えようとせず、

実に迫ってきますが、素直に認めようとし

るように思います。「老」は徐々にそして確 して「生」まれた喜びを忘れて生活してい

平成2

私たちは、忙しく明け暮れをして、人と

れば、幸いに存じます。

お時間の都合がつきましたらご参拝いただけ にて定例法話を勤めることになりました。

ったのです。

月1日

死を目にして人生の無常を感じました。 れを「四門出遊」といい、出家の機縁とな

しかし、ある日お釈迦様は、生・老・病

中に醜いもの・不浄なもの・不吉なもの・

決して一人で悩まずに一緒に人生を問うて

御同朋、御同行』の私たちですから、

いきましょう。

ご門徒の皆様へご案内

坊守が来る二月二十一日

(日) 名古屋別院

いましたら、ぜひお寄せ下さい。

した。皆様のご意見・ご要望がござ

年より「安楽寺だより」を発刊しま

その一助になればとの思いで今

ます」というこの例外なき事実を認め、

続けていかなければならないのです。

「生まれてきた以上は私もいずれ死を迎え

ます。

王子としてお生まれになりました。父王 お釈迦様は古代インドの一国・マガタ国

VI

王子の外出の時には、目に触れるものの

は

不幸なものなどがないように命じていまし

1	_	=	